

特別公開3

武蔵野美術大学 奈良寮

(おさしのびじゅつだいがく
ならりょう)



本日はご来場いただきありがとうございます。
ぜひゆっくり御覧ください。

奈良寮の歴史と概要

武蔵野美術大学奈良寮は、国宝及び重要文化財の仏像修復に大きな功績を残した日本美術院第二部会員故新納忠之介氏(1866年～1954年)の旧宅だったもので、明治初期に建築された畿内地方特有の大和棟高塀造りの民家です。

この旧宅を、武蔵野美術大学が譲り受け、昭和58年(1983年)以来、主に古美術研究のための宿舎として活用し、昭和63年(1988年)初めから7月にかけて、大和棟民家の本来の姿を出きる限り復元し、民族的遺産を保存活用することと、教職員・学生・校友の研究、研修に一層役立たせることを目的に改修復元工事を行いました。



この奈良寮は、故新納忠之介氏の旧宅です。

新納氏は、故岡倉天心創設の日本美術院第二部の院長として、国宝及び重要文化財の修復に心血をそそがれた方です。私達が古美術を通して学ぼうとするとき、その陰にあった人達の功績を忘れてはなりません。

裏面に新納氏の業績を記していますのでぜひご一読ください。

お問い合わせ:武蔵野美術大学 総務グループ総務チーム 042-342-6021

特別公開3

武蔵野美術大学

奈良寮

(おさしのびじゅつだいがく
ならりょう)



奈良寮と新納忠之介氏の業績

新納氏は明治元年(1868年)鹿児島藩士の子として生まれ、明治22年(1889年)に創立2年目の東京美術学校(現東京芸術大学)に入り、竹内久一・高村光雲らに彫刻を学びました。当時の美術学校教師陣は、日本美術復調にもえた岡倉天心を校長に、また日本美術に対し天心の目を開かせたアーネスト・フェノロサ(美術史)・森鷗外(美術解剖)、絵画では橋本雅邦・川端玉章・巨勢小石・狩野友信ら狩野芳崖(非母観音で知られる)の後を継ぐ狩野派の流れをくんだ指導者達でした。新納氏の在籍中日本画では横山大観・下村観山・菱田春草ら、のちの巨匠たちが学んでいました。

天心の作りだした校風はあまりにも自由奔放であったせいか風当たりも強く、卑語中傷の中、明治31年(1898年)美術学校騒動が起り、天心は校長の職を去ります。新納氏は助教授の職にありましたが、大観・観山・春草ら17名と共に天心のあとを追います。極だった新納氏らのいさぎよさでしたが、一方天心は時を待たずして日本美術院を創立します。日本美術院とは私立の大学院に相当し、正員26名を擁する上級研究機関でした。

上野谷中につくられた美術院の研究所では、大観・観山・春草・西郷狐月・寺崎広業・小堀鞆音らが起居を共にして研究を始めます。美術院の活動はこれら若手作家を中心とする美術・工芸研究の他に、月刊の「日本美術」の発刊と、美術院を会場として開かれた日本美術院展(通称院展として現在にいたる)でした。当時古社寺保存の機運も高まり、美術品修理も東京美術学校に託されていた頃で、新納氏は教鞭をとって活躍するかたわら、美術品の修復をも手掛けるようになりました。中尊寺阿弥陀三尊等もこの頃でした。明治34年(1901年)東大寺三月堂修復が日本美術院に託されるや、天心は新納氏を呼んでその任を伝えます。新納氏の胸中は複雑でした。すなわち、三月堂を失敗すれば奈良の地は踏めなくなる、しかし奈良を抜きにしての研究はあり得ません。

奈良の美術院は、初め東大寺勸学院内に置かれていましたが、その後無量院に移されました。新納氏は奈良美術院の所長を勤めた永い期間に、国宝仏を始めとして全国での修復数が2,600点を超えるという偉業を成され、文字どおり日本美術研究の重鎮の名にふさわしい活躍ぶりでありました。

私達もこの旧新納家に今あってその歴史の延長線上に立っているわけです。

